麦の穂

第58号

2016年8月

特定非営利活動法人

麦の会

TEL&FAX

022-299-1279

〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町 17-1　郵便振替口座　02200－8－46178

E-mail：muginokai@k5.dion.ne.jp　http://www.muginokai-koppe.com

目次

共同連東北ブロック交流会報告	飯嶋　茂	・・・ 1p
コッペ１泊旅行のこと	氏家　大介	・・・ 3p
10年経験者研修	千葉　梨絵	・・・ 4p
自分の人生	阿部　央希	・・・ 5p
夏ボラさんと過ごした日	斎藤　七恵	・・・ 6p
東日本大震災から５年	太齋　京子	・・・ 7p

2016年度　共同連東北ブロック交流会＆共同連マラソントーク報告

飯嶋　茂

共同連東北ブロックも立ち上げて３年目。初回は仙台、昨年は山形県鶴岡市と行った。東北ブロックといっても宮城と山形だけからの出発であったが、昨年は福島からの参加もあり、３回目となる今年は、福島県南相馬市で、７月９日(土)・10日(日)に行った。

テーマは、『～未曽有の震災、原発事故を経て、どのように一人ひとりの生活を支え、どのように働くことを支えてきたのか～　』

震災・原発事故から５年。放射能の影響といういわばマイナスから事業を再建していく中で、一人一人の生活をいかにして支え、働くことを支えてきたのか。南相馬の現在進行形の状況をお聞きし、各地での実践を報告してもらいながら、皆さんと「共に働く」ことを考えるという内容だった。

７月９日は、南相馬市鹿島区のNPO法人あさがおさんの「多機能事業所　ともに」と原町区のNPO法人さぽーとセンターぴあさんの「カフェビーンズ」を見学したのち、NPO法人コーヒータイムの橋本さんに南相馬市小高区と浪江町を案内していただいた。

あさがおさんは、豆腐・味噌づくりから、焼き菓子、お弁当、リサイクル等を行っている。お弁当は、近くのサービスエリアにも納入している。いりまめの「まめに元気」という商品はコッペも仕入れ販売して好評である。震災・原発・避難のお話は何回お聞きしてもその大変さが重くのしかかってくるが、最後はメンバーも全員集合して、「あかるく、さわやかに、がんばる、おれたち」をいう「あさがお」の由来にもな

っている姿を見せてくれました。

さぽーとセンターぴあさんの「カフェビーンズ」は南相馬市図書館が入っている建物の1Fにあります。図書館の建物自体も素敵なのですが、さをりの織物等で飾られたカフェの雰囲気がとてもいい空間を作り出しています。コッペのクッキーもレジ横で販売していいただいています。大勢の注文にもベテランのメンバーがしっかりと対応していました。こんどまたゆっくりおじゃましたいです。

その後、小高区と浪江町へ。小高区は7月12日に避難区域が解除されることになっており、それなりに街並みも戻ってきているのかなと思いましたが、浪江町は、報道等でも見聞きしていましたが、本当に震災後から何も変わっていない印象でした。案内していただいた橋本さんは、「浪江の今の現状を多くの人に知ってもらいたい、言ってもらえればいつでも案内しますよ」とおっしゃっていました。橋本さんが代表をしているコーヒータイムは、もともとは浪江町の事業所。現在は避難先の二本松で事業を再開しています。受け入れ先の二本松でも公共の建物の中にカフェを構え、よくしてもらっているとのことでしたが、浪江町によせる熱い思いが感じられました。

翌10日のシンポジウムには、コーヒータイムの橋本さん、さぽーとセンターぴあの郡さんの他、山形から、NPO法人山形自立支援創造事業舎「みちのく屋台　こんにゃく道場」の齋藤　淳さん・東京・日野市から認定NPO法人やまぼうしの伊藤　勲 さんに発題していただきました。

齋藤さんのところの特長は、なんといっても玉こんにゃくの移動販売車を4台もっていること。4つほどのスーパーとの契約をしている他、各種イベントにも出店しています。待っているのではなく、自分たちで色々な所へ出掛け、そしてお客さんとじかに触れ合えることで販売だけではなく、働いているメンバーへの理解も増えていくという移動販売ならではの利点を生かしています。また、山形市役所の食堂ともコラボし、レトルトの「市役所食堂カレー」は販売するなど、行政との連携も行っています。非常にユニークな取り組みで、ソレイユまつりにも来てもらおうか、などと考えてしまいました。

やまぼうしの全体像は、短い時間ではよくわからないぐらいの多岐に渡っています。今はやりの農福連携事業から、大学の構内などでのカフェ運営等、よくわかっていないので紹介もできないので、是非、機会を作って見学にも行きたいものです。

シンポジウムの最後には共同連の事務局長斎藤縣三さんから簡単に共同連についての説明をしていただきました。

参加者は、全国から50名程度、地元の福島からは、20名ほどでした。開催にあたっては、西さんをはじめとしたあさがおの皆さん、郡さんをはじめとしたさぽーとセンターぴあの皆さん、コーヒータイムの橋本さん、そして送迎を手伝っていただいた「ひろせ」の三浦さん、林さんに、大変お世話になりました。そして事務局を担ったくれた桑の木の皆さん、ありがとうございました。

南相馬での開催ということで、全国から集まっていただいたみなさんも、ありがとうございました。

共同連東北ブロック、細々ながら今後も続けていきます。またの機会にご参加をお願いします。

氏家大介

6月24日(土)6月25日(土)コツペのくりこま高原温泉郷へいってきました。
ひさしぶりに参加しました。
旅館到着してバーるにしました。
あったかいでした。よるごはんは竹の天ぷら
とゆさいのごはんかいました。
とってもおいしかったです。ぜざいあーとをたべました。メロンおいたです。
みんなでカラオケがっせんしました。
ぼくはキンキッズのゼットコースターロマンスをうたいました。かっこよくうたいました。
おみやげけをかいました。
しんこもちときゅうりのつけものかいました。
とってもたのしいかったです。

拝啓

盛夏の候、貴職におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、先日、実施させていただきました十年経験者研修におきましては、飯島代表理事様をはじめ、皆様に大変お世話になり、ありがとうございました。研修中は、至らない点が多く、何かとご迷惑をかけたのではないかと思います。二日間という短い期間でしたが、障害の有無に関わらず、皆様が一生懸命、美味しいクッキーやパンを作っている姿がとても印象的でした。そして、その仲間として迎えていただき、とても嬉しく思いました。また、足をひっぱってしまう形になってしまいましたが、クッキーやパン作りを教えていただき一緒に作業ができたこと、休憩時間にはたくさんお話ができ仲良くしていただいたことが、とても楽しかったです。

研修を行う前は、小学校教諭として、障害のある児童が将来、どのような場でどのように生活していくのか、様々な施設があることは存じていましたが、実際に見学したり一緒に活動したりする経験がほとんどなかったため、とても興味があり、不安でもありました。今回の研修を通して、コッペさんで働く障害者の方々のように、障害のある児童も自分の仕事を見つけ、仲間とともに楽しく、責任をもって仕事に全うしてほしいと強く思いました。このたびの経験を生かし、より一層自分を磨いて参りたいと存じます。

とり急ぎ、お礼を申し上げたく、お便りを差し上げました。このたびは、本当にお世話になりました。ご指導いただき、ありがとうございました。

敬具

平成二十八年八月三日

仙台市立東仙台小学校　千葉　梨絵

特定非営利活動法人　麦の会　飯島　茂　様

自分の人生

相変わらず自分の選んだ命です。

いつも大事な希望を支えて強く思っています。自分はこの気持ちは人生の生活の基本を大事な命かけて絆を命の強い気恩は自分の中にあります。もっと大事な気持ち希望を支えてくれるしっかりする自分の人生です。命の基本は強い自分の選んだ絆

阿部夫希

夏ボラさんと過ごした日

毎年、夏ボラさんがコッペに沢山来ます。暑い日に来てくれて、大変だなぁって思ってました。今回夏ボラさんが2人来てました。その中の1の人と仲良く出来ました。すごく嬉しかったです。写真も2人でとりました。たのしかった

Uさんはすごく優しくて、人柄がすごくいいなぁ

私もUさんのことがすごく気に入りました。大好きです。

みんなで写真とる時にUさんが一緒にとろうと言ってくれたのでうれしかったです。

Uさんコッペに又来てほしいです。

斎藤七恵

「東日本大震災から５年経って」

NPO 法人奏海の杜　太齋　京子

NPO 法人奏海の杜は、東北関東大震災障害者救援本部の支援により宮城県南三陸町で立ち上がった被災地障がい者センター南三陸が前身です。その草の根活動の中で上がってきた要望が障がい児や在宅障がい者の日中活動支援でした。

この震災で被災地には様々な分野で支援が入りましたが、その中で元来地域が持っていた課題も浮かび上がってきました。障害者福祉はその代表で、特に障がい児の日中活動支援の場は震災前のこの地域にはなかったのです。地域の繋がりが密接でお互いさまの文化が色濃く、サービスが無くても生活が成り立っていたということも言える一方で、サービスがなかったために、障がい者は地域へ出づらく、障がい者への理解が進んでいるとは言い難い地域でもありました。しかし震災で地域のコミュニティが崩れ、否応なくサービスの必要性が増したため、様々なご支援をもとに活動の場がいくつか生まれることとなりました。震災から５年が経った今、これらの障害者施設には、急速に進む人口減少や障害者福祉の基盤の脆弱さから、支援者も利用者も少ないという運営的な課題が重くのしかかります。しかし支援現場では、子ども達の心が安定したり保護者の方が仕事に就かれたりと大きなプラスの変化も確実にありました。いまや私たちの活動は利用者の方々のライフラインの一部になっていると確信しています。笑顔を生むお手伝いが出来たとしたら、それが私たち誇りであり、１人でも多くの方と１日でも長く繋がっていきたいと試行錯誤を続けています。

東日本大震災による南三陸町の死者・行方不明者は 832 名（宮城県災害対策本部/2016 年 3 月）、震災直前の人口は 17,429 人なので、震災で実に人口の 5%近い人がかえらぬ人となりました。そして国勢調査速報によると、2015 年 10 月現在の南三陸町の人口は 12,375 人、人口減少率は実に 29%となっています。これは被災地域では女川町に次いで 2 番目に多い数字でした。年齢別の集計結果は今年 10 月に出るとのことですが、急速な高齢化、特に働き手となる世代の減少を肌で感じています。そして、増え続けている震災関連死。これは、津波や家屋倒壊など災害の直接的な被害ではなく、長期の避難生活による過労やストレス、住環境や生活の質の劣化などが誘因となり、発病や持病の悪化などによる死亡のことですが、福島県で 2,007 人、岩手県で 455 人、宮城県では 918 人がそれぞれ認定されました（2015 年 12 月 28 日現在）。その原因は避難所生活や移動による肉体的精神的疲労が半数をしめており（復興庁による）、先行きの見えない生活が与える心身へのストレスの影響が明

らかです。うつ病や飲酒量の増加、PTSD に関しても深刻な調査結果がでています。2015 年 3 月 10 日の河北新報に、興味深い被災地住民のアンケート結果が掲載されていました。この３年で被災地の心身ストレスは減少している地域が大半であるのに対し、南三陸町のストレスは増大していたのです。人口減とストレスの間には必ずしも直接的な関係は見られず、前向きな施策がされている地域では、人口が減っても住民のストレスは緩和されているという考察でした。

現在の南三陸町は、山を削って宅地を造成し、その土を平地に盛って土地を 10 メートルかさ上げし、さらに高い防潮堤で海と遮断することで住民の安心安全を創ろうとする、広大な工事現場です。昔の風景がみるみるかき消えていきます。私たちは、自然に大胆に手を加える力業に違和感を覚えながらも、明るい未来を信じて目の前の生活に精一杯といった状態です。山を削らねばならないため、災害公営住宅の建設には時間がかかり、５年が経過しても半数以上の人が仮設住宅に住んでいるという状況。当初２年が限度と言われていた仮設住宅は、壁にできた隙間やカビの発生と折り合いながら暮らすしかすべがありません。先が見えない不安の中、日々の生活を建て直しながら、復興の急速な流れについていくには、心身ともに柳のような強さが必要だと実感しています。

このように、日常生活さえ落ち着かず先行きに不安を抱える人々が多い中で、将来を見据えた環境を作ろうというのが現在の被災地での活動です。状況は刻々と変わり、それとともに人の気持ちも生活スタイルも変わって行くので、先の見通しを立てるのが非常に困難な５年間でした。そんな中、昨年３月には県内で唯一活動を続けてきた南三陸災害ボランティアセンターが閉所し、非常時の体制に一つの区切りがやってきました。総合ケアセンター・南三陸病院の開設（2015 年 12 月）、魚市場の本設（2016 年６月）、さんさん商店街の本設（2017 年３月予定）、家屋の新築も町内至る所で本格化し、非日常から日常への息吹は確実に聞こえています。震災から５年、やっと 10 年先や次世代まで考えた１歩を踏み出せる時期になったかと、感慨深いものがあります。地域の復興の風に乗って、奏海の杜もより多くの声なき声を拾えるよう、周りとの連携を深め、誰もが自分らしく暮らせる魅力的な地域への復興を目指して、これからも活動を続けて参ります。被災地で歩む奏海の杜の挑戦に、変わらぬご支援を何卒よろしくお願いします。